

# 東アジア貿易上に占める沖縄港湾の地位

—特に14世紀を中心として—

千須和 富士夫  
(港湾経済研究所)

## 目 次

1. 新井白石の沖縄研究と港湾事情の紹介
2. 「おもろ」時代の沖縄港湾
3. 東アジア貿易と14世紀の沖縄社会

### 1. 新井白石の沖縄研究と港湾事情の紹介

享保4（1719・清康熙58）年12月戊午の自序のある新井白石の「南島志」は、わが国の沖縄研究、とりわけ歴史地理の大要を伝える最初の優れた業績である。

白石の「南島志」を著した意図は、客観的な社会情勢の要請するところの、国内外に対する認識の深化と幕藩体制の危機に対する幕閣の対応策の追求といった基盤に支えられたものであったが、直接的には、中国人の記録の是正を求めるものであった。すなわち、

「その国（琉球）の風俗、隋書に載せるところ最も詳し。後の説は因って述べるなり。明嘉靖中、給事中陳侃、行人高澄と与にその國に往封し、還るに及び、「使琉球錄」2巻を上つりて言う。『従前の諸書は、また伝説多し。乞う錄するところ史館に下しめん』と。詔これに従う。後人遂に陳氏の書をもってその実を得たりとなすなり。前者、宝永・正徳の際(1710~11年)、中山（琉球国王）、美（新井白石は名を君美といふ、自称）らを来聘し、教旨を蒙る。その人に見るに異言の采覽するを得たり。因って陳氏の駁するところ、いまだ必ずしも尽くこれを得ず、従前の諸書いまだ必ずしも尽くこれを失せざるを知りたり。蓋し隋より明に至り十世を歴すの間、その國の沿革、また同じからざるあり。しかして君長の号、国地山川の名、その風俗語言と古今

殊に異なるはあによくその間に訛謬なきを得んや。然ると雖も、美、嘗つて国史に拠ってこれを考へるに、隋及び歴代の書において証するにその国人の言をもってす。古の遺風余俗なお今に存するはまた少からざるなり。すなわち、旧聞を紹(抽)釈し、もって南倭志を作る。」(原文は漢文一引用者注「南島志総序」)

新井の説は、隋書の大業元年、同3年、同4年の記事で、海師何蛮なるものが東に望見できる島を尋ねて、羽騎尉朱寛と出かけ、流求國に到ったが、服従させることができなかつたとある「流求國」を琉球とした最初の説である。また推古天皇24年(616・隋大業12年)に掖玖人が來たとある日本書紀の記録によつて、わが國との交渉の初めとしている。やはり隋書で邪久といつており、掖玖も益久も夜句も益救も東方の古音は皆通じ、掖玖とは琉球のことであると断じたのである。今日でも、掖玖=琉球(沖縄)説は完全に否定されていない。新里恵二も「続日本紀」の文武帝3年(699)、靈亀元年(715)の記事について、夜久は屋久島だけを指すものではないのではないかと疑問を投げかけている<sup>(1)</sup>。

さらに源為朝が流れに順じて求めたから流求と称するとか、明世法錄にあるような「島が波間に蜿蜒として虬が流浮してみえるところから流虬、転じて琉球となった」というような諸説も、古文献により挙証し、あわせて合理的判断をもつて論破しているのである。これが彼の優れた業績である。沖縄の呼称を最初に与えたのも白石である。

隋書にみえる大業3年(607)、羽騎尉朱寛が到達した「流求國」、当時の倭人が「夷邪久国」と称した地域は、1910年代後半に入つて、白石の流求國=沖縄説に反論する形で、民俗学・歴史学の論点となり、現在では元史の「瑠求國」までは、台湾の南部を指すものとして落着いている。しかし唐代の陶器、宋元の磁器が今日でも発見されている状況から、考古学の発掘調査が今後進行するにつれ、まだ確定的な意見とはしにくいように思われる<sup>(2)</sup>。

新井白石の南島志による18世紀初頭の沖縄の港湾について管見してみると、おおよそ次のとくである。

沖縄本島には、海港が2か所あり、東北にあるのは運天港（湊）といい、湊は水上、人の会するところで、この間に海舶が泊するところである。運天湊はもと運見泊に作り、今帰仁間切にある。湊とはこの間、古言では水門といふ。<sup>みなと</sup> 港の深さ（奥行）は1里27町、闊は2町で、大船50～60隻が<sup>せい</sup> 梱泊できる。ここから東北に行くと与論島へ至るに20里である。

沖縄本島の西南にあるのは、那覇港という。都城（首里）を去ること1里余、この間<sup>(3)</sup> 及び海外諸州の船の輻輳するところである。那覇港はもと那覇津に作る。港の深さは22町、闊は1町20間あり、大船30隻が泊するに堪える。長崎を去ること300里、朝鮮を去ること400里、塔加沙古の東南海角を去ること480里、塔加沙古とは今の台湾のことである。港口の四邑の居民居蕃盛んである。那覇港官4員（名）を置いて分治している。迎恩亭（冊封使の歓迎応接のための建物、通称は通堂と呼んでいた）<sup>(4)</sup>、天使館（冊封使の滞在する建物、滞在中は竿上に黄色の標旗を掲げ、政府から都通事1名、秀才20名が毎日詰め、用務を果した。7司が置かれたが、そのうちの評価司が物価を評定し、交易を司る官吏であった）<sup>(5)</sup> もこの那覇港近くにあった。これらの建物は中国使人を迎接するところである。今帰仁（沖縄島国頭郡）の西北の港は、爾与波入江といい、伊惠（江）島の島港を去る約2里である。

久米島には、港は2つある。南にあるのは兼城湊で、港の深さは1町、闊は50間で大船4～5隻が泊することができる。東にあるのは町屋入江という。この港は浅くかつ狭いので船は泊することはできない。ともに那覇港を去ること48里である。国史では球美、明人は古米と称しているが、闊人36姓の後えいの居住しているところである<sup>(6)</sup>。（これは白石の誤聞である。）

与論島には阿賀佐泊という港がある。運天湊を去る東北20里行ったところにある。港口は浅狭で大船は容易に出入はできない。

永良部島の港は大和泊という。与論島より東北に13里行ったところにある。港の深さは2町24間、闊は2町40間、大船はいまだに出入は容易ではない。

徳（之）島には港が3つあり、東にあるのを秋徳港といい、深さは1町、闊は□（不明）町、大船は3隻泊すことができる。永良部島より去って東北行すること

18里にして、ここに至れる。西にあるのを大和爾也泊という。北にあるのを井之川といい、西・北2港ともに浅狭で、大船は容易に入出できない。

大島には港が8つある。西古見湊といい、焼内湊といい、大和馬場湊といい、奈(名)瀬湊といい、深井浦といい、世徒多浦といい、瀬名浦といい、住用湊という。西古見湊の深さは50間、闊は30間、大舶5～6隻は泊することができる。ここから徳之島へ到る海路は2つある。その1つは真南へ18里行くと井之川に抵る。他の1つは西南に18里行けば、大和泊に抵ることができる。焼山湊は東□(不明)里にあり。深さは3里、闊は30町、大船200隻は泊することができる。その東7里に大和馬場湊があり、深さは5町、闊は3町、大船5～6隻は泊することができる。またその東5里に奈(名)瀬湊がある。深さは12町、闊は5町で大船15～16隻は泊することができる。その東北□(不明)里には深井浦があり、深さは30町、闊は4町、大船30隻は泊することができる。その東南8里に世徒多浦がある。ここは浅狭で船は泊することができない。その南4里には瀬名浦があるが、やはり船は泊することができない。その西南4里半に佐用湊があり、深さ3町、闊は2町で、大船7～8隻は泊することができる。この南から出て西北に転ずると西古見湊に抵り、約13里の里程である。

鬼(喜)界島の港は西にあるのを椀泊といい。すなわち、明人(閩書に見える)のいう吉住である。世徒多浦より東南行7里にして、ここに至る。

宮古島には船の泊すべきところはない。ただ針孔浜という船寄せがある。

石垣島には港が2つある。西北にあるのを河平湊といい。宮古島の針孔浜を去る58里半、深さは6町30間、闊は1町、大船20～30隻を取泊できる。南にあるのを御崎泊といい。港口は浅狭で船は泊することができない。ただ西南の要津であるのみである。

以上が新井白石によるところの沖縄の港湾事情である。彼は島名を掲げても、港名のあげていない場合は、実質的な船寄せはあったとしても無視している。

沖縄、久米両島は、いわゆる三山時代の中山に属し、与論、徳(之)島、永良部、大島、鬼界の諸島は山北に属し、現在の奄美群島であり、宮古、石垣両島

は山南に属した。

さて、古代琉球の港湾とその当時の港湾の果した役割に私たちは目を転ずることにしよう。

## 2. 「おもろ」時代の沖縄港湾

沖縄の古代、中世を通じて、最も重要な史料の1つに「おもろそうし」がある。奄美・沖縄両群島の古謡を記録編集したので、全22巻中、第1巻は嘉靖10年(1531)、第2巻は万暦44年(1616)、第3巻から第22巻までは天啓3年(1623)に編纂されている。第10、13巻は船歌を中心にしており、その他の巻にも港湾、造船、航法、貿易などの一面を伝える重要な示唆に富む歌謡が散見される。

ここでは、この「おもろ」を手掛りに、12~17世紀の事情を伝承した歌謡から、港湾の名と機能を明らかにしたい。すでに「おもろ」を資料とした貿易、造船、航法については伊波普獻の業績<sup>(7)</sup>があり、東恩納寛惇<sup>(8)</sup>、安里延<sup>(9)</sup>、秋山謙蔵<sup>(10)</sup>らも注目しているが、港湾についてはまとまった意見は出されていない。いま「おもろそうし」にみえる港名を抽出すると、表1のとおりである。

那覇は15世紀までは「浮島」と呼ばれる島で<sup>(11)</sup>、ここを港(泊)として開発したのは1452年(明景泰4)尚金福王である。「首里におわる てだこが／浮島はげらへて／唐 南蛮 寄り合う 那覇泊」(753 以下外間守善の表記による)とみえ、那覇泊は「那覇港」(1354)、「親泊」(792)とも呼ばれた。もっとも「親泊」は泊の美称で、どこの泊にも付されたとみてよい(872, 1052)。

那覇港は、三山統一後は、琉球王国の首都の港として、国内の貢納品の搬入基地ともなり、天久口(今の泊港)がこれを補った。「朝戸 捷<sup>あさと おきて</sup>(奄美大島古里村朝戸の村役人) 親みかま(人名)／賛積む<sup>かまき</sup> 首里親國<sup>しょりくに</sup> 天久口<sup>あめくぐち</sup> 親泊<sup>とよ</sup> 那覇泊<sup>なは</sup> 親泊」(1052)とあるのがそれである。もちろん後述するような南海・中国・日本・朝鮮との通商基地となったこともいうまでもないであろう。

浦添は古名を渡嘉敷といった。「聞ゑ浦添に／西東の貢 持ち寄せて／鳴響む浦添に」(1077)の如く浦添の門口(今の牧港)は貢納品が搬入されたもので

表1 「おもろ」にみえた沖縄港湾一覧

港 名	所 在 地	おもろ番号
◦那霸港（泊）・親泊	沖縄本島那霸市	753, 792, 868, 869, 900, 1052, 1354
天久口	同那霸市外真和志村字天久 (泊港)	1052
浦添の門口・渡嘉敷の門口	同浦添市(牧港)	871, 1083
きとむなわの泊・面影の泊	同宜野湾市喜友名	1101
運天・小港	同国頭郡今帰仁村運天 (運天港)	1027
あきみよの泊・うらはまの泊	同島尻郡玉城村百名	872
屋宜の浦・吉の浦	同中頭郡中城村屋宜	60, 61, 996
屋古泊	同島尻郡大里村	882
馬天の浜	同島尻郡佐敷村馬天	514
知念	同島尻郡知念村	1310
与那霸浜・綾子浜・しつこ浜	同島尻郡大里村与那原	514, 511
伊敷下	同島尻郡摩文仁村伊敷下	538
せち新神泊	久高島(徳仁港)	853
◦いちなわの浦・新崎の浦・具志川の泊	久米島具志川村(兼城港)	539
◦真徳浦	徳之島	931, 932
◦与和の泊	沖永良部島	936
◦名瀬の浦	奄美大島	949
ふさすの泊	不 明	872
せむらい、うつの浦	沖縄本島国頭郡屋我北村済中 出	910, 911
前兼名	同国頭郡久志村前兼名	875

(注) 1) 外間守善註「おもろそうし」(日本思想大系18, 岩波書店) より抽出。

2) 最後の2者は造船地

3) ◦印は新井「南島志」にみえる。

あろう。

運天は小港と別称される港である。「おもろ」には、「大和の軍やまと 山城の軍やしろ いくさ すなわち大和（本土）から押し寄せてきた軍隊の上陸の場として出てくる（1027）。国頭郡今帰仁村は源為朝が本土より漂着したという伝説の地である。

きとむなわの泊、面影の泊は、第2尚氏の尚円王金丸（1415～1476）が登場する「大にしのたつちが節」（1101）にみえる。金丸の事蹟と歌謡の討伐事業とは一致しないように思われるが、不明である。あきみよの泊は、稻作の起源地と伝えられる受水走水、俗称「御穂田」の古名「あきみよ」の海口とされる。うらはるの泊は同じものである。屋宜は「屋宜から（中城城に）くすぐり 上る＼直垂したたれ や 鎧／誰が 着ちへ 似せる／按司添いてだす／召しよわちへ 似せれ／比嘉から 上る」（60）とあるように、中頭郡の中城城主のための港であり、大和からの武具等の輸入港でもあった。屋宜の浦は吉の浦とも称された（61）。浦は本来は12世紀頃から発達する地縁団体の新集落をウラまたはシマと呼んでおり、集落は海岸に面したものである。ここでは浦は港の意味を含んでいる。屋古の泊というのは、島尻郡大里村の与那原であろう。外間守善は屋古港としているが、むしろ、与那覇浜（514）、綾子浜・しつこ浜（511）と出てくる与那原か、もしくは馬天浜（514）で、ここは「浦廻り 崎廻り」あるいは「国廻り」のための船が出発するところと歌われている。知念については、「きこへとうやまが節」に「知念社城／唐の船／沢山寄る城／大国社城」（1310）とあるように、知念城付近に中国船の寄る港があったと推察される。知名か具志堅であろうか。伊敷下は「伊敷下 もりぐくすく 世界報 よう が ほう（幸福を）／寄せ着ける泊／愛し かねどの 金殿（人名）よ／石へつは（石槌で） こので（作って）／金へつは こので／伊敷 寄り直ちへ／なたら（傾斜地） 寄り直ちへ（削って平坦にして）／楠は こので／大和船 こので／大和旅 やまと たび 上て／山城旅 やしろたび 上て／珈波羅 かはら（勾玉） 買いに 上て／手持ち（宝玉） 買いに 上て／思い子の（若君の） くわため ため 为す／わり金が（若君の名） ため たま たま 为す」（538）とあるように、日本本土への貿易船の仕出港であった。

知念岬沖合いの久高島の港は「せち新神（不可視の靈力の新神が守護される）の泊」と呼ばれ、「雲子寄せ泊」とも美称された（853）。すなわち宝物が集ま

る港の意味である。現在の徳仁港であろう。

久米島の兼城港は、「いちなわの浦」「新崎の浦」「具志川の泊」としておもろにみえる。(539)には稻米・新米を船卸しする状況が歌われている。「あおりやへが節」には「具志川の真玉内(まだまかうち) (城の美称) は／げらへて(作って)／良く げらへて／勝りゆわる精高子(せだかこ) (勝れ給うお方)／金福の真玉内(こがね) (具志川城の美称) は／げらへて／唐の船(さかね) せに(酒) 金(かな)／持ち寄せる城／良く げらへて／大和船(さかね) せに 金／持ち寄せる城」(582, 1507)とみえ、久米島からは磁鉄が船積みされて行った。「久米の島 在つる／磁石金(つしゃこがね) 渡ちへ／二首里社上せて／按司添いに みおやせ (領主様にご覧に入れよう)／金の島(かな) (久米島の美称) 在つる」(969), 「島尻 (久米島仲里村の島尻) に 在つる／磁石の真金」(633)などの例がそれである。

徳之島では真徳浦、沖永良部島では与和の泊、奄美大島では名瀬の浦の名がみえる。

おもろは各地から集められた古謡とはいえ、編集上の政治的配慮から無視されたり、採取の面からすべてを包含できなかつたり等々の制約条件を考慮すれば、「おもろそうし」に歌われていないからといって、そこに港なら港の実態がなかつたとは決していい切れない。安里延が三山時代の3大貿易港として指摘する親泊(山北の港、今泊), 糸満(山南の港、兼城), 泊(中山の港、泊)<sup>(12)</sup>の3港のうち、親泊、糸満はおもろには現われていない。編者の尚政権の作為的な編集方針によるものかとも思われる。明に対して通貢を山北、山南、中山の3政権が行なっているので、進貢船の出港地は各政権領内にあったと考えておくのは、むしろ妥当であろう。

### 3. 東アジア貿易と14世紀の沖縄社会

唐宋から元朝にかけて、東アジア貿易の中心的な「商品」となったものは、中国産品と南海産品であり、アラビア商人は西から中近東・アフリカ・インド産品を運び込んできた。アラビア人は、高麗順宗15年(1024—宋仁宗天聖2)に100人も連れだって朝鮮・高麗王朝に方物を献じたと伝えられるほど、東ア

ジアへの進出はめざましかった<sup>(13)</sup>。

沖縄では、按司の支配する社会がさらに発展して、14世紀中頃には、山南、中山、山北の3つの按司連合政権が成立していた。山南王大里按司の支配する諸城は、佐敷、知念、玉城、具志上(頭)，東風平、鳴尻、大里、喜屋武、摩文仁、真壁、兼城、豊見城、中山王は那覇、泊、浦添、北渓(谷)，中城、越乘、読谷山、具志川、勝連、首里、山北王今帰仁按司は羽地、名護、国頭、金武、伊江、伊平也(屋)などが勢力範囲であった。中でも中山王は、浦添、泊、那覇の良港を抑えて海外交易に有利な地位を占めていた。1349年(元至正9)，浦添の謝名村から出た「謝名むい」が王統を継ぎ、察度王となった。

明朝が中国に成立して5年目の1372年(洪武5)，太祖は「琉球招諭」を行ない、朝貢を促してきた。中山王察度は同年泰期を進貢使として派遣し、山南王承察度は1380年(洪武13)，山北王柏尼芝は1383年(洪武16)にそれぞれ進貢使を送り、以後、察度の卒する1395年(洪武28)までの24年間に、中山は25回、山南は13回、山北は8回の使者派遣があった。ところが藤田豊八の研究によれば、元史仁宗本紀延祐4年(1317)10月戊午の条及び万曆33年重修温州府志卷18を引用して「波羅公管下密牙古人」はすでにこの14世紀初頭にシンガポール海峡付近にまで赴いていたことを裏付けている<sup>(14)</sup>。

密牙古は宮古島、波羅公は牌古米または牌金、すなわち中山官制では3品から7品に至る官位の親雲上を表わすが、それ以前は各島の首領を表示したものとみている。また中国側でも、この密牙古人の言葉を解する者がいたとある。さらに沖縄からの出土品を陶磁でみると、唐の黄釉綠褐彩絵碗が八重山諸島西表島で発見されており、宋・元時代の青磁片・白磁片、染付(元様式)については、沖縄本島浦添城、浦添市花部貝塚(青磁)、伊祖城(青磁片)、棚原城(同)、三和村伊原(同)、保栄茂城(同)、伊計城(青・白磁)、並里貝塚(同)、阿波城(青磁)、喜友名城(同)、コザ市仲宗根ウガン(同)、恩納城(同)、中頭郡具志川城(同)、瀬底貝塚(同)、嘉手納村(同)、具志頭の新城・赤頭(同)、伊是名城(青・白磁・染付)、今帰仁城(青・白磁・黒釉・青花〔元明あり〕)、中城城(青・白磁・青花・黒釉・明を含む)、安慶名城(青磁・青花・明を含む)などである。

む), 首里城(青・白磁・黒釉・青花・三彩・緑釉・明を含む), 南山城(青磁), 勝連城(青・白磁・黒釉・磁州窯白地鉄絵・青花〔元明〕・明五彩・安南焼五彩), 北中城村ヒニ城(青磁), 本島外で時代のはっきりしているものでは, 久米島具志川城(宋青磁), 石垣島ニラスク(宋元の青・白磁), 西表島平西貝塚(宋青磁・明青花), 兼次古島(宋元青磁), 与那国島与那国町(元明の青磁・青花), 宮古島からは時代が判明しない青・白磁片の他, 明の青花片も出土している<sup>(15)</sup>。こうしてみると, 中国本土との交易関係は, 宋代までは確実に遡りうるであろう。

察度を継いだ中山王武寧は, 佐敷按司出身の尚巴志によって滅された。1406年(永楽4)のことである。尚巴志の勢力が成長した源として, 新里恵二は佐敷が馬天・与那原という港に近接しており, 海外貿易によって力を蓄えた以外にその根拠は求め難いとしている<sup>(16)</sup>。尚巴志は, 中山征圧後10年, 1416年(永楽14)に北山王攀安知を討ち, その14年後の1429年(宣徳4), 南山王他魯毎を攻略し, 遂に全土統一を成し遂げた。

昭和7年(1932)に琉球王国の外交文書「歴代宝案」が公表された。東恩納寛惇らの努力によるものであるが, 昭和10年(1935)の史学会大会で秋山謙蔵が学界にこれを紹介し, 続いて秋山, 東恩納, 小葉田淳<sup>(17)</sup>らの研究成果が発表され, 尚巴志時代(1422~1439)から尚貞(1669~1729)に至る約300年間の对外通商状況が明らかにされた。その関係国は中国, 朝鮮, 日本, 邻羅(タイ), 安南(ベトナム), 爪哇(ジャワ), 三仏齊(スマトラ島パレンバン), 満刺加(マラッカ), 蘇門答刺(スマトラ), 巡達(セレベス島スンダ), 仏大泥(マレー半島バタニ)である。琉球王国の公式通商をみても, その東アジア貿易における広範な通商圈と次表のような多様な貿易品の流通並びに仲介貿易の華やかな展開は, 統一以前からの通商実績と統一後の積極的な公式通商支持, 恵まれた港湾の存在によって, はじめて可能となつたといえるであろう。

表 2 中世沖縄外国貿易品一覧

国名	沖縄よりの輸入	沖縄への輸出	公式通商開始年
中 国	磁鉄・馬・硫黄(土産)・胡椒 蘇木(南海産)・腰刀・甲冑武具・馬具・屏風・扇子・匣・酒梅・生漆(以上日本本土産) 丁香・檀香・黄熟香・烏木・胡椒・螺殻・海巴・香(南海産)・瑪瑙・象牙・生紅・銅錫・夏布・牛皮・降香・木香速香	暦・黃綾・絹匹・陶器(大小青盤・青磁碗)・鉄器(銅金類)・銅錢・銀幣・鈔綵綾・綿布	洪武5(1372)
朝 鮮	薔香・川芎・烏木・丁香・檀香・沈香・胡椒・象牙・白礪蘇木・丹木・金欄・段子・青磁器・青磁花瓶・深黃(硫黄)・錫・沙魚皮・天籠酒犀角	經典・厚紙・白摺扇・白紵布・黒麻布・白細布・緜布苧麻布・人蓼・松子・満花席・清蜜・焼酒・虎豹熊皮椅子等	洪武12年(1379) 直接取引は少なく、対馬・博多商人を介した
暹 羅	絹織物(織金段・素段・色段・雲段・官段・花段) 磁器(大青盤・小青盤・小青碗)(以上中国産、以下同じ) 腰刀・摺紙扇(以上日本本土産、以下同じ) 硫黄(土産、以下同じ)	蘇木・薔薇水(花露)・上等布羅(山南不)・星幾措(絹金綾)・上水花布(サラサ)・吉地布(般割道具・カチャブ)・林母拿(ラモナ・樂器・香花紅(酒)・花糸黃布(黃地サロン)・鎖狀(ビロード)	洪熙元(1425)
旧 港 (三仏斎)	素段(無地の綸子)・磁器(大・小青盤・小青碗)(中国産)・閃色段・羅・漆盤・漆棊	胡椒・苾布・長文節智・頂口・沈香・紅花布・細布・象牙	宣德3(1428)
爪 瓦	素段・織金段・色段・花段(色染綸子)・磁器(小青盤・碗)・腰刀・扇	薔薇水・胡椒・檀香・丁子香・肉荳蔻・白荳蔻・沈香	宣德5(1430)
満刺加	色段・大青盤・小青盤・小青碗・腰刀・扇	椒達布・南口莫口耶布・上別布・別底咱・南母拿・山南八・紹達布・火外生已采・胡椒・蘇木・好三達打布・薔薇水・生已措(絹金綾)	天順7(1463)

国名	沖縄よりの輸入	沖縄へ転出	公式通商開始年
		・左達(絹布)・茲布(白細布)・嗜那里(モスリン)	
蘇門答刺	素段・雲段(綾織緞子)・官段(色染綸子)・大小青盤・小青碗・腰刀・扇	蘇木・沈香・象牙	天順7(1463)
安南	硫黄・色嬪夏布(以上土産)・甲冑・刀剣・弓矢・生鉄(日本本土)	磁器	正徳4(1509)
日本	磁鉄・練蕉布・上布・綵布・綿子・縮布・蘇木・香類・黃金・綠醤・砂糖	鉄塊・瓦・勾玉・刀剣・武具・扇子・屏風・針	応永10(1403)

出典 ① 東恩納寛惇「黎明期の海外交通史」及び秋山謙蔵「日支交渉史研究」小葉田淳「中世南島通交貿易史の研究」より抽出。  
 ② ジャワ・スマトラ・アンナンは上記の書より輸出を求められない。拙稿「元朝港湾政策史研究序説」を参考とした。

注(1) 新里・田港・金城共著「沖縄県の歴史」(昭和47年) pp. 32~33

(2) 秋山謙蔵「東西交渉史論」(昭和19年) pp. 261~279「台灣島発見」の項参照。なおわが国の版図の認識についても中国側は極めてあいまいであることは、同氏の引く元末延祐(1320年)にできた朱思本の「廣輿圖」で、東海海夷總図中に、わが国を朝鮮東南の島国とみているのはよいが、遠江、尾張、迎(近江)、長門・修(備)前・修後・赤(間)関・大宰庄・肥前・肥後・豊前・豊後の地名を長円形の中に書いている。沖縄の部分は読めない。

明初の洪武5(1372)年に琉球王国の対中国朝貢関係が樹立される以前は、中国側の琉球国の版図についての認識は定かではないという事実は、わが国と中国大陆との間に散在する大小の島々のうち、領土を画するに足る強力な政治権力の存在が、これと対立する権力との間で認識し合う実態がない限り、版図自体が存在しなかったとみてよいであろう。何らかの社会的経済的評価が加わって、はじめて領土の意識が芽生えるといえる。

(3) 間切のことであろう。間切は行政区画の「村」のことである。琉球史辞典, p. 762

(4) 琉球史辞典, p. 263

(5) 同上書, p. 570

(6) 間人36姓の移住地は、正しくは那覇市の久米・天妃町で唐營(中華街)と呼ば

- れていた。同上書, p. 258
- (7) 「伊波普猷全集」第6卷所収「おもろにみえたる南海貿易」
- (8) 東恩納寛惇「黎明期の海外交通史」(昭和16年) p. 258。船名と船の研究がみられる。
- (9) 安里延「日本南方発展史—沖縄海洋発展史—」(昭和16年) p. 8 以下。
- (10) 琉球史辞典 pp. 629~31, 那覇及び那覇港の項, 東恩納 p. 78
- (11) 秋山謙蔵「日支交渉史研究」(昭和18年)
- (12) 安里「前掲書」p. 23, p. 27
- (13) 新村出「南蛮記」(大正4年) pp. 147~177
- (14) 藤田豊八「東西交渉史の研究 南海篇」所収「琉球人南洋通商の最古の記録」
- (15) 矢部良明作成「中国陶磁出土遺跡一覧表」(「日本出土の中国陶磁」(1975) 所収) の沖縄県の項
- (16) 新里「沖縄県の歴史」p. 47, 秋山「前掲書」p. 206。秋山は中山が統一事業を成功させた根拠として貿易を位置づけている。
- (17) 小葉田淳「中世南島通交貿易史の研究」(昭和14年)